

# 香澄

平成26年  
秋季号



パートナー情報誌 KASUMI 第1号(通巻39号)

発行日：平成26年10月31日  
発行人：パートナー情報誌  
「香澄」編集委員会

編集委員：  
浅野明宏、尾形孝彦、新関紀文、  
廣原毅、安川敏行、渋谷一貴、  
戸井昌子、土肥奈津子、坂巻佳織

## パートナー情報誌「香澄」発刊にあたって

パートナー香澄は2007年4月に第1号が発行され、その後名称をパートナー情報誌「香澄」として、第38号まで発行することが出来ました。これもひとえに関係者の皆様方のご協力と感謝致しております。今年度は、霞ヶ浦環境科学センターに於けるパートナー活動体制見直しに伴い「香澄」編集体制の見直しも行い、新たな体制での「香澄」発刊となりました。編集委員は、全パートナーを対象に募集を行い、応募頂いたパートナー（5名）とセンター担当者（4名）でのスタートとなりました。「香澄」発行の狙いとしましては、センターに於けるパートナー個々の活動の枠を超え、情報の共有・交換をし合うことで、パートナー同士及びセンターとの一体感を深め、各種活動の促進に役立てる情報誌を目指したいと思っております。見直し内容として、発行頻度を6回/年から4回/年とし、編集会議の開催日も、毎月第1週の金曜日から土曜日に変更しました。また、多くのパートナーの皆様にご覧いただくために、発送方法等も工夫していきたいと思っております。紙面は、パートナーの皆様のご活動を通じた体験記、また趣味、俳句、川柳、写真などを自由に寄稿して頂き、“楽しく読める”紙面づくりに努めたいと思っております。パートナーの皆様のご協力、ご支援を宜しくお願い致します。

(編集長：パートナー尾形)

## 「パートナー制度の改正について」

当センターが開設され、10年を迎えるにあたり一つの節目としてH26年度5月1日にパートナー制度の改正をいたしました。これは、パートナー制度が施行され、パートナーの皆様が活動を始められた当時とは、センターの事業費や事業方針、職員などセンターを取り巻く環境が、10年の歳月とともに変化していった結果、今回の制度改正は、センター、パートナーの皆様、双方にとって必要であったと考えています。制度改正の説明会の際にもお話をさせていただいたように、これまでの制度と大きく違うところは固定グループ制を廃し、登録により自分の興味のある活動に参加しやすくしたところにあります。センターといたしましては、パートナーの皆様にご覧いただく当時の新鮮な気持ちで活動に参加していただければと考えています。同様にパートナー情報誌「香澄」も38号と回を重ねており、新生「香澄」がこれからもパートナーの皆様の間を繋ぐ情報誌として歴史を刻んでいくことを願っています。併せて、今年度は試行期間ということもお話したところですが、歴史あるセンターパートナーの活動が、若い人の加入も促進しながら更に充実した活動に育っていくことを願ってやみません。

(環境活動推進課長 宮本)

## パートナー情報誌「香澄」原稿募集

香澄編集委員会では、皆さんからの原稿をお待ちしております。皆様の活動紹介や体験記、また私の趣味、センター内で見つけた新発見、パートナーからの呼びかけ（各種イベントの通知、参加者募集など）知らせたいこと、紹介したいこと、賛同してほしいことなどありましたら、内容を紙面にまとめセンター2階のパートナーズルームに設置の「香澄」専用ポストに投函して下さい。お待ちしております。

## パートナー活動の紹介

### センター内の水槽管理について

センターには1階に大水槽が3槽、タッチ水槽、水生昆虫槽があり、2階には小型・中型の水槽が18槽あり、定期的（2週間隔）に水の交換、清掃管理を行っています。給餌については、センター職員が担当しています。これら水槽には、霞ヶ浦に生息する魚類の展示をしていますが、水槽の数関係や水槽飼育には向かない魚類もあり、展示はその一部となっています。毎月1回の魚の「定点調査」では、年間30種類ほど確認されていますが、実際の展示は11種類程度です。また、「ブルーギル」「オオクチバス」「チャネルキャットフィッシュ（アメリカナマズ）」など、話題の魚は特定外来生物となっており飼育していません。今後の取り組みとしては、来館者の皆様が興味を持ち楽しんで頂けるよう説明表示板を付けたり、2階の水槽配列の工夫（在来種と外来種の区別）をしたいと思っております。併せて、1階のタッチ水槽も改造を検討し、来館者（特に小学生）に身近で楽しんで頂けるように考えたいと思っております。現在まで、寒い日も、猛暑日も年間を通して両名が専任で長期間担当しており、特に夏季の水槽の汚れには苦慮しておりますので、担当者の増員及び交代制等の検討・改善を希望します。



(パートナー：高崎・三橋)

### 環境学習補助活動の紹介

パートナーの環境学習補助活動は、研修室における水質調査やプランクトン観察の補助活動とセンター野外観察の補助活動です。以下の写真で活動の様子をご覧ください。



研修室での水質調査



研修室でのプランクトン観察



野外での水辺・魚の観察



野外でのプランクトン観察



双眼鏡で霞ヶ浦の観察



野外での植物観察

(パートナー：浅野)

## パートナー霞ヶ浦クリーン Up 活動

平成23年度から活動を開始し、今年で3年目を迎えましたこの活動もすっかり定着してきました。途中、天候不順等により幾度も中止を余儀なくされましたが、パートナー及びセンターの皆様方のご協力を頂き、霞ヶ浦湖岸の限られた区域（2.3km 範囲）ではありますが、年々ゴミの量も減少してきており、参加者の地道な活動が見える形で結果が出ており、参加者一同嬉しく思っております。今年度から、当活動はセンターに申請・承認を得ることになり、新たに自主活動として活動しております。昨今の活動では、パトロール中の河川事務所スタッフや、釣り人が声を掛けてくれたり、ゴミを持ち帰ってくれたりとコミュニケーションも図れ、活動テーマである“我々の財産でもある霞ヶ浦をきれいな環境で将来に引き継ぐ”に少し近づくよう継続して活動を推進していきたいと思っております。



(パートナー：尾形)

## 「いきもののにわ」の整備について

本年度より、環境活動推進課並びにパートナーの皆様と新たな体制で、「いきもののにわ」及び「上池」周辺の整備に取り組んでいます。「いきもののにわ」は、センターが開館後にセンターとパートナーの皆様と一緒に整備したものです。昨年度からは環境学習において積極的に活用を図ってきたことから、環境学習担当を中心にパートナーの皆様とともに整備することとなりました。パートナーの皆様には、現在月2回ほどの整備日を決めてご連絡を差し上げているところです。毎回数名のパートナーの皆様のご協力を得て、環境活動推進課の職員と一緒に活動しています。4月当初の「いきもののにわ」の状況は、決まったところに植栽されていた植物が混在していたり、雑草に埋もれていたりとありますが、パートナーの皆様のご協力を得て整備を進めることができました。7、8月は大変暑い中ではありましたが、整備活動を行うことで草に埋もれることなく管理することができました。紙面上ではありますが、ご協力頂いたパートナーの皆様にお礼申し上げます。

「いきもののにわ」の整備は、未だ不十分な状況ではありますが、新たに植栽する植物や混在する植生の管理、さらには植物の名札の整備など行うべきことは多々あります。今後とも皆様のご協力を得て、「いきもののにわ」並びに「上池」周辺の整備を進めて参りますので、ご協力の程よろしく願いいたします。



(センター：富田)

「私の細道」(その11)

黒羽 黒羽は芭蕉の町である。「おくのほそ道」の旅途上、芭蕉はこの地に13泊している。その故か、黒羽城跡の側に、芭蕉に関連する資料を展示した「黒羽芭蕉の館」があり、その周辺数キロに芭蕉関連の遺跡が整備されている。「芭蕉の句碑めぐりコース」のパンフレットもあり、12のスポットに句碑が置かれ、スタンプリューも出来る。「なすの」を越えてこの「黒羽芭蕉の館」を訪れた私と妻は、館の学芸員新井敦史氏から周辺句碑の丁寧な説明を受け、しばし、句碑巡りに興じた。「おくのほそ道」によると、芭蕉は黒羽滞在中、「犬追物跡」「玉藻の前の古墳」「那須八幡宮」「修験光明寺行者堂」を訪れたと記している。それぞれ由緒ある旧跡である。黒羽のあたり一面は「那須の篠原」として歌枕の地となっており、古くから歌に詠まれ、下野風土記にも記載されている。その昔、鳥羽院の寵姫「玉藻の前」が実は狐の化身である事がわかり、この狐が那須野に逃げ込んだ事から起きる物語が故事を作り、「犬追物跡」「玉藻稲荷」や後に登場する「殺生石」などの旧跡を生んだ。また、源平の合戦で有名な那須与一の生まれた地でもあり、那須神社はそのいわれに纏わる神社である。芭蕉はこれらに感銘を受けたのであろうか、「おくのほそ道」に「感応殊しきりに覚えらるる。」と記している。修験光明寺も、那須与一が伏見光明山即成院の弥陀仏を勧請して建てたといわれ、芭蕉の訪れた時には、役の行者の像が安置された行者堂があったという。そこに安置されていた下駄を拝しての一句が「おくのほそ道」に掲載されている。



玉藻稲荷神社

夏山に足駄を拝む首途哉  
芭蕉

玉藻稲荷と那須八幡宮は現存するが、犬追物跡や修験光明寺は今やその面影は無く雑木林となっている。芭蕉は江戸を発って6日目に黒羽に到着し、その後ここで13泊もしている。まるで、旅の最初の目的地が黒羽であったのではないかとも思われる行動である。実は、黒羽を所領する大関藩1万8千石の城代家老浄法寺高勝(俳号桃雪)とその弟鹿子畑豊明(俳号翠桃)は芭蕉の弟子であった。芭蕉はかつて「桃青」と号しており、その「桃」の字を用いている事から余程芭蕉に心酔していたであろう事が推察できる。この兄弟は幼い頃から故あって一時追放の身となった父親と共に江戸住まいをした事がある。その折に芭蕉と縁を持った可能性もある。翠桃は、芭蕉らの黒羽訪問の前年、芭蕉の高弟服部嵐雪の「若水」三歌仙に曾良と共に加わっている。「おくのほそ道」では、翠桃は「桃翠」、桃雪は「浄坊寺何がし」と異名で紹介されている。芭蕉と曾良は、浄法寺邸に8泊、翠桃宅に5泊している。余程の歓待を受けた事は想像に難くないが、それにしても長すぎる気がする。全150日の「おくのほそ道」は、まさに「旅に死せる」ごとき辛きことの多き旅であったが、その中で黒羽の14日間は武家屋敷でゆったりと過ごした異質の時間であった。これは一体何を意味するものであろうか。何故長逗留をしたかについてはいろいろと取り沙汰されている。大方の見方は、梅雨時期の長雨の中で、地元の弟子達に引き留められ、ついつい逗留し、前途の用意を調べ息を養ったのであろうとされている。ただ、この長逗留に対しては別の見方もある。実直に毎日の記録をしている曾良の随行日記に、この黒羽の数日間に行動記録の無い部分がある。経歴に謎の多い曾良の、幕府にとって最も諜報すべき伊達藩に近いこの地での行動に、謎めいた憶測をする向きもある。幕府から要請された伊達藩の日光改修が始まったのは4月13日であり、芭蕉や曾良の黒羽逗留時期に合致する。状況調査するには最適の距離とも云える。また、別の見解もある。この時期、黒羽大関藩は藩主の急逝により僅か二歳の幼君の襲封が認められたばかりであった。中名生正昭氏は、芭蕉らは幕府の命により、この大関家幼君相続の是非を調査していたのではないかと推測している。ただ、芭蕉と高勝らとの師弟の関係を考えると、この説には少々無理があると思う。なお、曾良の随行日記によると、芭蕉らが黒羽に来てまず出向いたのは、仏頂和尚ゆかりの「雲巖寺」であるが、これについては次回で取り上げる。

(パートナー：小松)

編集後記



くまちゃん人形の衣替え センター受付でみつけた感動・・・受付は入館者が真っ先に対面する場所ですね。そこはセンターの表玄関。気づかれたでしょうか。受付 飯塚美穂さん特技の手芸による心遣い。そう、着せ替えてくまちゃんです。浴衣、ハッピー、サンタさん、ハロウィンから水戸黄門に至るまでコスチュームは実に様々。マイク入れカバンもあります。行事や四季の移ろいを感じさせる、ささやかな気配り。お客さまも思わず微笑んでしまいます。今後も皆さんで受付カウンターに注目して参りましょう。

(パートナー：新関)